

## テサロニケ人への手紙第一1章 「響き渡った評判」

### 1A 思い起こす祈り 1-4

1B 使徒からの挨拶 1

2B 神に愛された者たち 2-4

### 2A 広がる信仰の姿 5-10

1C 聖霊と力の現れ 5-6

2C 使徒たちと主に倣う者 7-8

3C 生ける神への立ち返り 9-10

## 本文

私たちの学びは、今日からテサロニケ人への手紙に入ります。第一の手紙、そして第二の手紙です。今から、第一の手紙の1章を見ていきます。テサロニケの町で起こったことは、非常に興奮するようなことです。8節にその興奮が、パウロの口から出ていますが、主のことばが彼らのところから出て行ってギリシア全域に広がり、それだけでなく、彼らの信仰の生き活きとした姿が、あらゆる場所に伝わっているとあります。しかも、使徒の働きから分かるのは、パウロがそこに滞在できたのは、わずか一か月弱だったということです。新しく信じたばかりの人々の間にある、すばらしい神の聖霊の証しです。彼らの信仰と愛と、希望に満ちた姿が、他の地域の信者たちに伝わって、大いなる励ましとなっていました。しかも、彼らは、迫害を物ともせず信仰を貫いていたのです。

ところで今年、2023年は、特別な時となっています。コロナ禍があり、ウクライナで戦争があり、物価高騰があり、社会が混乱しています。しかしそのような時に、アメリカでは、アズベリー大学というところで、学生たちに聖霊が注がれました。全米の大学に飛び火しています。そして、ジーザス・ムーブメントという、私たちカルバリーチャペルの始まりについての関心が一気に上がりました。それについての映画が上映されたからです。聖霊が働かれると、どんなに大きな困難があろうとも、「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって」とあるとおり(ゼカリヤ4:6)、主のなさることを妨げることはできません。主が御霊によって事を行われるのであれば、どんな障壁も平らになります。ゼカリヤの預言にも、大いなる山が、神の恵みによって平らにされるとあります(4:7)。

この手紙の背景、テサロニケの町のことについてお話します。パウロたち一行は、まだ小アジアにいた時に、マケドニア地方に行くことが主のみこころであると知りました。マケドニアというのは、今のギリシアの北部です。ここの最も大きな特徴は、ローマが東方に向かってギリシアを倒し、さらに東方に向かうための道を付設したことです。アドリア海に面する町から、東ローマ帝国の都、コンスタンティノープルまで延びる、エグナティア街道です。ローマ軍がそこを通過して東方に向かう、軍用の幹線道路です。それが、交易など、他の目的にも用いられるようになりました。

ピリピの町のことを思い出してください。そこはローマの植民都市でしたね。アレクサンドロス大王の父ピリッポスにちなんでピリピと名付けられたのですが、そこをローマが征服しました。テサロニケも同じです。アレクサンドロス大王の総督の一人、カッサンドロスが自分の妻のテサロニカにちなんで、テサロニケの名を付けました。しかし、ここをローマが征服し、後に自由都市となりました。ローマの影響が非常に強いので、皇帝礼拝も盛んに行われていました。そのため、パウロたちについて、こんな訴えをその町の者たちがしました。「世界中を騒がせてきた者たちが、ここにも来ています。(17:6)」「彼らはみな、「イエスという別の王がいる」と言って、カエサルの詔勅に背く行いをしています。(17:7)」パウロが宣べ伝えていた、「このイエスこそキリストです(17:3)」という言葉が、皇帝に背く不敬であるとみなしたのです。それで、パウロたちは町をすぐに、出て行かなければいけなくなりました。テサロニケの新しい信者たちも、非常な困難の中に陥りました。

確かに、テサロニケの人々がイエス様を信じた時、この方が、確かに王の王、主の主として来られることを受け入れていました。イエス様が単なる良い教えをするすばらしい人のようにして受け入れたのではありません。聖霊が臨まれる時には、キリストが今にでも来られ、神の国が臨むのだという確信が与えられます。この方が、よみがえられた主であり、最初であり、最後である方であることが、明らかにされます。イエス革命のリバイバルが起こっていた時、人々が救われ、聖霊の働きが大きく現れたのですが、イエスがすぐにでも来られるという期待と希望が強烈に与えられました。テサロニケ人への手紙がその通りで、神の右に着座しておられる御子が、天から来られることが前面に出てきます。

その他の、この手紙の特徴は、何ととっても、新約聖書の中で、最も早く書かれたものだという事です。紀元後51年辺りだと言われています。パウロが第二次宣教旅行でコリントにいた時に、書いています。テサロニケを離れて、ペレアに行きました。そこで、彼はシラスとテモテと別れました。それから船に乗って、アテネに行きました。アテネにいる時に、シラスとテモテがやってきて合流しました。けれども、テサロニケの人々のことが気になります。彼らのところには、三つの安息日に渡って、イエスがキリストであることを宣べ伝えたことが書かれていますが、つまり、三週間前後しかいなかったのです。すでに困難の中にあるのに、新しく信じたばかりの彼らが、サタンの誘惑によって、自分たちの労苦が無駄になってしまうのではないかとパウロは案じていました。それで、彼らを再びテサロニケに送ったのです。そしてパウロがコリントにいる時に、二人は戻ってきました(使徒 18:5)。そこで、テサロニケの人々が、信仰に堅く立っていることを知ったのです。それで神に感謝して書いているのが、この手紙です。

#### **1A 思い起こす祈り 1-4**

#### **1B 使徒からの挨拶 1**

<sup>1</sup> パウロ、シルワノ、テモテから、父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。恵みと平安があなたがたにありますように。

パウロは、手紙の送り手に、自分の次に、ためらうことなく、「シルワノ、テモテ」と二人の名を挙げています。

シルワノは、シラスのことです。ローマの公用語であるラテン語の名が、シルワノになります。シラスのことは覚えていますでしょうか、シリアのアンティオキアから二回目の宣教の旅に行く時に、パウロとバルナバが、マルコを連れて行くかいかないかで論争になり、二人が分かれてしまった時に、パウロがシラスと共に行くことを決めました。シラスは、元々、エルサレムの教会における、指導的な人です。エルサレムで、異邦人もそのまま、信仰によって救われることを指導者たちが決めました。その時、教会は、アンティオキアに遣わす人たちとして、ユダとシラスを選んだことが、使徒の働きに書かれています(15:22)。アジアのトロアスから船出して、ピリピの町で宣教をした時も彼がいました。そして、ピリピで鞭打たれて牢に入れられた時も、パウロといっしょにいて、傷だらけの二人は、その中で祈り、神を賛美していました。福音のために苦しみを共にしていました。

テモテは、パウロの二回目の宣教旅行で、ガラテヤ地方にあるリステラで、パウロの旅行に同行するようになりました(使徒 16:1)。これまで私たちがピリピ人への手紙でも見たように、パウロと思いを一つにして、主に仕えていました(ピリ 2:20-22)。このシラスとテモテが、パウロと共に、テサロニケ人に心を寄せて仕えていました。

そして、「父なる神と主イエス・キリスト」とありますね。ここは、「父なる神また主イエス・キリスト」と訳したほうが、ニュアンスが出てきます。神とキリストが一つであることが意識されています。そして、教会が、父なる神と主イエス・キリストの内にあります。私たちが、いつも、私たちの教会が、父なる神と主イエス・キリストの内にあるのだと知ることは大切です。

その中にあると、そこには「恵みと平安」があります。パウロは、この手紙でこの挨拶を使っていますが、それ以後の手紙でも、同じ挨拶を使っていますね。恵みは、ギリシア人が挨拶で使う「カリス」です。平安は、ユダヤ人が挨拶で使う「シャローム」です。それを合わせていることによって、主が異邦人とユダヤ人を一つにされていることを示しています。そして順番も大事です。恵みの次に平安があります。神の恵みがあってこそその、平安です。恵みを知らないと、自分の今の状態に左右されるので平安がありません。恵みは、神のご性質に拠っています。この方が一方的に私たちを憐れみ、好意を寄せておられます。ゆえに、平安によって守られるのです。

## 2B 神に愛された者たち 2-4

<sup>2</sup> 私たちは、あなたがたのことを覚えて祈るとき、あなたがたすべてについて、いつも神に感謝しています。

パウロは、テサロニケ人たちのことを覚えて祈ると、神への感謝に満ち溢れます。わずかな期間しかおらず、そこから逃げてしまったので、彼らがどうなっているのか分からないでいたけれども、

それでもその信仰が、生きていることを聞き、神がなされていることをはっきり認めることができるからです。私も、宣教地で伝道していたけれども、人間的には中途半端な形で日本に戻ってきました。けれども、そのわずかな聖書の学びがきっかけで、信仰をもって、まっとうなキリスト者の生活をしている話をずっと後で聞くことができた話を思い出し、いつも感謝がでています。

<sup>3</sup> 私たちの父である神の御前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。

祈りの中で、彼らの信仰の働き、愛の労苦、そして望みの忍耐を思い起こしています。午前礼拝で学びましたように、単に信仰ではなく、信仰の働きがありました。彼らの信仰は生きていました。その行い、働きに、その信仰が生きていることを認めることができたのです。そして、愛の労苦がありました。愛を言葉だけで語っていませんでした。言葉だけでなく、労苦の中に愛していることが現れます。イエス様が、捕らえられる最後の夜に、最後まで弟子たちを愛されたとあり(ヨハネ 13:1)、その後で、弟子たちの足を洗われました。このように、労苦や奉仕の中に愛が具体的に、見える形で現れるのです。

そして、信仰と愛と共に、希望に支えられた忍耐があります。今、受けている困難を支えていたのは、主が間もなく来られる希望があったからです。これを、何か今の現実から逃げたいという、現実逃避で考えたら誤りです。主が来られることは、今の困難があっても、それでも主が全てを支配しておられて、必ず報いてくださるという確信があるので、それで今の困難を耐えることができるようにするのです。逃避ではなく、現実を直視する勇気を、主の来臨の希望は与えてくれます。

<sup>4</sup> 神に愛されている兄弟たち。私たちは、あなたがたが神に選ばれていることを知っています。

テサロニケ人の彼らに、信仰の働き、愛の労苦、希望の忍耐があるのは、ひとえに、神の一方的な選びがあるからです。神の選びがあるからこそ、彼らとその選びと召命に応じているだけで、その実はすべて神が結ばせてくださっているものです。私たちが神を選ぶのではなく、神が私たちを選ばれたことを知ることは、非常に大事です。私たちの信心深さなど、からし種のような小さいもの、いや、それ以下です。神の選びにある力が、私たちを守るのです。

イエス様を裏切った弟子は、イスカリオテのユダですね。けれども、ペテロも、主を三度も知らないと言いました。でも彼らに何の違いがあったのでしょうか？ユダは後悔しただけで、自殺しましたが、ペテロは真実に悔い改めました。けれども、その前に彼らには神の選びが、あつたかないかで大きな違いがあったのです。イエス様が祈られました、「ヨハ 17:12 彼らとともにいたとき、わたしはあなたが下さったあなたの御名によって、彼らを守りました。わたしが彼らを保ったので、彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためでした。」ユダは、イエス様を選んだのです。だから裏切ることができました。ペテロは、イエス様を選んだので、

神の御名の中で守られていたのです。

そして大事なのは、愛されているので、選ばれたということです。選びというと、私たちはとかく、優れているから選ばれていると思われてしまいます。いいえ、全く違います。神がイスラエルを選ばれた時のことを思い出してください。「申 7:7-8 【主】があなたがたを慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が少なかった。しかし、【主】があなたがたを愛されたから、またあなたがたの父祖たちに誓った誓いを守られたから、【主】は力強い御手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王ファラオの手からあなたを贖い出されたのである。」

イスラエルを見れば、彼らがどれだけ、神に背を向け、罪を犯し、優れていないかを、聖書の中で認めることができるのではないのでしょうか？それにも関わらず、いや、それだからこそ、神の愛がいかに真実で、あきらめないものなのかを見ることができないのでしょうか？異邦人であっても、キリストにあって、このイスラエルに対する神の一方的な憐れみと、その憐れみに基づく選びを受けています。だから、私たちにどんなに問題があっても、主は私たちを聖別しておられます。私たちによって、人々は神を見て、キリストを見なければいけなくなります。地の塩、世の光です。私たちが、何をしているかという以上に、神が私たちと共におられるということが証しされるのです。

ところで、テサロニケにおける宣教で、ユダヤ人の会堂でパウロは福音を宣べ伝えましたが、大勢の異邦人が付いてきました。「使 17:4 彼らのうちのある者たちは納得して、パウロとシラスに従った。神を敬う大勢のギリシア人たちや、かなりの数の有力な婦人たちも同様であった。」神を敬うギリシア人がいました。異教の神々にない、イスラエルの神にあるすばらしさを彼らは知っていました。神の聖なる姿は、その一つでしょう。異教の神々には聖というものはないからです。しかも、ここに、有力な婦人たちも多くいました。ピリピの教会でも、ティアティラからの女商人、リュディアが初めの回心者でしたね。ギリシアの世界では、女は動物よりは上ですが、男より劣ったものとみなされています。しかし、イエス様は、福音書にあるように、見下げられている女でも、人格をもって、アブラハムの娘だということで救ってくださいました。女が、キリストにあって男と等しいのです。新約時代以後の初代教会でも、教会には、社会で見下されている女や子供が多くいました。

ですからなおのこと、神に愛され、選ばれていることは彼らにとって救いとなっていたことでしょう。

## 2A 広がる信仰の姿 5-10

### 1C 聖霊と力の現れ 5-6

<sup>5a</sup> 私たちの福音は、ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いたからです。

テサロニケ人の信者に、これだけの実が結ばれているのは、それは神の御力の現れに他なりません。

せん。私たちが何をしているかではなく、神が何をされているかという恵みこそが、福音です。福音は、イエスが私たちの罪のために死なれたこと。葬られたこと。そして三日目によみがえられたことが、その内容です( I コリ 16:3-4)。これらを、もちろん、ことばによって宣べ伝えます。「ロマ 10:17 ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」

しかし、ことばだけでないのです。これらのキリストについてのことばを、ただ知的に受け入れて、同意するだけで救われるわけではありません。神の力が必要です。福音の本質は、知的理解ではなく、力にあるのです。「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」

そして、その力は御霊と共にやってきます。聖霊が臨まれると、私たちは力を受けます。パウロが、コリントに来た時は、弱まっていた。心には不安がありました。ピリピから始めて、テサロニケでの迫害、そして逃げるようにしてアテネに来て、アテネでは独りぼっちでした。しかし、そのような不安の中でコリントにいた時に、福音を語ると人々が信じて行ったのです。「 I コリ 2:3-4 あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました。そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。」

そして、「強い確信を伴って」とあります。確信こそが、信仰の要です。信仰は、感情でもありません。知性による理解でもありません。深い確信、強い確信です。「ヘブル 11:1 さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」強い確信は、私たちがどんなに知的に把握しようとも、また感じようとしても、得られるものではありません。ただ一方的に、主が力をもって、御霊によって臨まれる時にこそ、与えられるものです。そして、これは恵みによって与えられるのです！みなさんが、「私はそんなにきちんとしていないから、そんな強い確信を得るのはいけません。」と反論されるかもしれませんが、いや、確信は、自分が気づかない、意識していないからこそ、むしろ強く抱いているものです。あまりにも真理だと信じているから、重力の法則を当たり前のように受け入れているように、真理を受け入れています。

それから、「あなたがたの間に届いた」とありますね。テサロニケ人への手紙には、三つのことを話しています。一つは、どのように、パウロたちを受け入れて、その語るみことばを受け入れたか？ということをお話しています。そして次に、神のことばとして受け入れたので、みことばが生きて働いていた、そして彼らを変えたことが書かれています。そして三つ目に、その変えられた彼らが、他の人々に福音を伝えて行く、ということです。福音がいかにも、人々を通して伝わっていくのかを、この手紙は見事に伝えています。

<sup>5b</sup> あなたがたのところ、私たちがあなたのためにどのように行動していたかは、あなたがたが知っているとおります。<sup>6</sup> あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを

受け入れ、私たちに、そして主に倣う者になりました。

主のことばが、力をもって、聖霊によって、強い確信を伴って受け入れられました。その結果、もう一つの大事なところは、変えられた人生です。みことばだけでなく、主に倣う使徒たちに、彼らも倣っていきました。2章に入りますと、いかにパウロたちが、彼らに自分たちの姿を見せて行ったかを説明しています。

これは、主の福音の中で非常に大切なことです。なぜなら、福音によって、この世にはない、新しい生き方が生まれてくるからです。そこに前例がありません。異なる、神の御国の文化と言ってよいでしょう。ですから、主イエスご自身が、ご自分の姿でその生き方をお見せになりました。だれが一番偉いのか？と弟子たちが議論している時に、イエス様は小さな子を連れて来て、この子のようにならなければ神の国に入れなことを語られました。

そのようにして主の姿を弟子たちは見ていき、そして弟子たちがその姿を他の人々に見せて行きます。そのことによって、神を知らない人々の中で生き、自分自身もそうであった人たちが、キリストにあってどのように生きて行くのかを知っていくことができます。パウロは、コリントの人たちに対して、「私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。」と語っています(Ⅰコリ 11:1)。

冒頭でお話した、アズベリー大学での聖霊の注ぎのことですが、礼拝堂で延々と礼拝が献げられていましたが、それでもいつもの授業は続行していたそうです。それは、御霊の働きを妨げるのではなく、むしろ、大学のキャンパスで、主のことについて語るその会話が一気に広がり、それぞれの場所で、主に倣って生きるという実践が広がるためだったのです。

そして、テサロニケ人が福音を信じて、受け入れたことで大事なことは、彼らが「多くの苦難の中」にいたということです。パウロたちに対して激しい迫害が起こりましたが、彼らは逃げました。けれども、残されていたテサロニケ人たちは、おそらくは、皇帝礼拝を否定していることに対して、人々が怒り狂っていたのではないかと考えられます。それから、テサロニケの町は、当時は飢饉が起こっていました。コロサイの町と同じように、悪いことが起こると、それは神々が呪いとしてもたらしているとみなしていました。イエスという神が来たから、こんな災難な目にあっているのではないかとみなしていました。

私たちの国でも、もし御霊の働きが力強く現れたら、国の中で起こっている災難を、キリスト者のせいであるとなすりつけることが、十分に起こりえます。かつて、ホーリネスの諸教会にリバイバルが起こりましたが、日本が戦時体制に入って、彼らが真っ先に取り調べの対象にされました。今、リバイバルも何も起こっていないのに、安倍首相が凶弾に倒れたという衝撃的なことが起こって、人々が統一協会絡みで宗教嫌いを露わにしました。ですから、多くの苦難があるということを私た

ちは覚悟していないといけません。

しかし、それでも主は勝利します。私たち教会も主にあって勝利します。なぜか？「聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ」ていたからです。聖霊の働きは、困難な中にあっても喜びを与えます。その喜びは、主からのもので、超自然的なものです。主が私たちを愛されて、罪のために死んでくださった。そして、三日目によみがえってくださったという福音には、たった今、困難の中にあっても、それを乗り越える、喜びの力を与えます。ガラテヤ地方で、迫害を受けているキリスト者に、ペテロが第一の手紙でこのように語りました。「1:8-9 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです。」みなさんも、自分の生活や人生で困難な中にあるのにもかかわらず、福音を聞いて、信じている中で、聖霊による喜びがあるのではないのでしょうか？

## 2C 使徒たちと主に倣う者 7-8

<sup>7</sup> その結果、あなたがたは、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範になったのです。<sup>8</sup> 主のことばがあなたがたのところから出て、マケドニアとアカイアに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰が、あらゆる場所に伝わっています。そのため、私たちは何も言う必要がありません。

マケドニアだけでなく、アカイアにも彼らの評判が伝わっています。アカイアは、ギリシア半島の南の部分です。アテネやコリントがアカイアにあります。彼らのことが、今、パウロが手紙を書いているコリントのところまで、彼らの信仰が伝わっていたのです。パウロの働きの目的は、彼らが主にあって堅く立っていることなのですが、ここまで大きな反響があるのですから、目的がほぼかなえられています。だから、何も言う必要がないとまで言っています。ここで、「響き渡った」というパウロの言葉がいいですね。これは声を出して、こだまするような意味合いです。音速で伝わっているという意味です。今でこそ、SNSで主の御霊の働きが一気に広がりますが、当時は、テサロニケは、エグナティア街道沿いにある大きな都市であり、その中で人々に伝わる速度は、ものすごかったのでしょう。

彼らがいかに、信者の模範になっているか、うかがい知れるのが、コリント人への手紙第二です。パウロ一行は、エルサレムに行き、そこで貧しい兄弟たちに、異邦人主体の教会から献金をするプロジェクトを行っていました。そこで献金を募っていたのですが、マケドニアで起こったことを紹介しています。「8:2 彼らの満ちあふれる喜びと極度の貧しさは、苦しみによる激しい試練の中にあってもあふれ出て、惜しみなく施す富となりました。」彼らは、迫害を受けて経済的に非常に困難な中にありました。それにも拘らず、喜びにあふれて、自分たちの力以上に献げたのです。信仰者としての模範が、マケドニアにあったのです。

### 3C 生ける神への立ち返り 9-10

<sup>9</sup> 人々自身が私たちのことを知らせています。私たちがどのようにあなたがたに受け入れてもらったか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、<sup>10a</sup> 御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスです。

テサロニケの人たちに聞くまでもなく、人々が彼らの評判を語っていて、周り巡ってパウロたち自身に届いていました。三つのことを、人々は彼らに知らせています。

一つは、「私たちがどのようにあなたがたに受け入れてもらったか」ということです。これは、彼らが信仰をもって、パウロたちが語ることばを聞いていたということです。2章13節で、その受け入れられた姿を説明しています。「あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受け取ったとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」人間のことばではなく、神のことばとして受け入れていた、ということです。人々の心が鈍い時は、福音の語り手のその語り方に目を留めます。しかし、聖霊に満たされている人は、そんなことはどうでもいいのです。主が語られていることを聞く耳を持っています。

次、二つ目は、彼らが立ち返っていることです。「あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり」とあります。テサロニケの町は、他のギリシアの町々と同じく、偶像でいっぱいでした。しかし、それらのことから、彼らは立ち返りました。神々と呼ばれているけれども、生きていない偽物から離れて、生ける、まことの神に立ち返りました。立ち返る、あるいは悔い改めることをしなければ、信じることはできません。多神教の中では、神を信じるというのは、数多くの神の中に一つ神を加えることに他なりません。しかし、そこには関係がありません。たくさんの女と関係を持っている男に、どの女にも愛を持っていないことは明白ですね。ただ、そこには男の欲望しかないのです。しかし、ただ一人の女性を選ぶところに、真実な愛の契約があります。それと同じです。主なる神に立ち返るというのは、この方だけが生ける神、まことの神であるということです。自分自身を捨てて、キリストを心の王座にお迎えすることです。

そして三つ目は、御子が天から降って来るという希望を抱いていました。「御子が天から来られるのを待ち望むようになった」と言っています。新約聖書の聖徒たちには、今の教会にあるような、再臨というものを語らないという雰囲気は全くありませんでした。切迫感をもって、期待して待っていました。それは、ユダヤ人たちが聖書の預言から元々、そのように信じていたからです。

聖書には、罪によって死が世界に入っている、今の世を教えています。しかし、かの世、やがて来る世は、罪と死に打ち勝つ、復活によって始まることを教えています。ダニエルが預言しました、

「12:2 ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。」主が来られて神の国を建てる時に、このように人々が復活するのです。しかし、イエスがすでに死者の中からよみがえられました。つまり、ある意味、神の国がすでにやって来たのです。しかし、矛盾しますが、まだやって来ていません。イエスが復活の初穂となってくださり、次に信じている者たちがよみがえります。そして世界が新たにされます。そして復活した者たちがその神の国に入るのです。だから今は、この世に、かの世が少し入り込んだ状態なのです。ですから私たちは絶えず、イエス様が天から降りて来られて人々を復活させ、そして神の国が到来することを切望して、待っている状態なのです。

パウロは、聖書にあるこの終末観をしっかり、大半が異邦人であるテサロニケ人にも教えていました。ユダヤ教徒は、メシアが来られて、神の国を建てられる。その時に、人々を復活させるということを普通に信じています。ゼカリヤ書 14 章に、主は戻って来られてオリーブ山に立つと預言があるので、真っ先に復活にあずかるため、オリーブ山にはユダヤ人の墓地在り広がっているのです。

そしてもう一つ、メシアが、「やがて来る御怒りから私たちを救い出してください」方だということも、ユダヤ人たちが普通に信じていることです。聖書にそう書かれているからです。主の日というのは、神の御怒りが、罪と不正に対して下ります。しかし、へりくだる者、心の貧しい者、神を信じている者たちは、御怒りからかくまわれ、そして救われます。イエス様は、その救いのために来られたのに、それでもユダヤ人の指導者たちが信じないので、災いと呼ばれました。マタイ 23 章で神の御怒りが彼らに下ると宣言されました。エルサレムと神殿がローマによって破壊されましたが、その苦難から救われるのは、ユダヤ人が主を認める時であることを語られました。

そしてパウロは、キリストが死なれたのは、将来の神の御怒りから私たちを救われる土台になることを教えています。「ロマ 5:9 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。」

主が天から降りて来られて、その御怒りから救われるというのは、どういうことでしょうか？聖書において、人々が御怒りから救われる時に、例えばエノクは、主と共に歩いて、天に移されました。それから洪水がノアの時代にやって来て、神が御怒りを現わされました。ロトが、ソドムから出て行くことによって、主が天から火を降らしました。御怒りは、それを現すところから、正しい者たちを移すことによって救われるのです。4 章には、主が天から降りて来られて、死んだ者たちはよみがえり、生き残っている私たちが共に空中にまで引き上げられるとあります。地上に下される御怒りを、私たちを天に引き上げることによって救い出される、ということです。この御怒りについては、テサロニケ人への手紙第二で、パウロは詳しく語ります。

私たちはまず、この御怒りから救われるために、主が愛して血を流してくださったことを覚えるべきです。「主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。」とパウロは言いました( I コリ 11:26)。